

丁岳(ひのとだけ)

登山日:2010年10月3日

(冠字番号 呂 4)

成果 X=-107587.52m
Y=-52862.06m
標高 1145.59m

点	選	点	明治 27 年 5 月 17 日	選	点	者	真田義啓
の	埋	標	明治 27 年 7 月 6 日	埋	標	者	高井鷹三
記	観	測	平成 8 年 9 月 18 日	観	測	者	金野幸広
(備考) 平成 8 年 8 月 12 日柱石更新、高度基準点測量							

コースタイム

登山口	——	丁岳山頂	——	萱森	——	庄屋森	——	観音森	——	登山口
8:00	2.4km	10:00	2.3km	11:10	0.4km	11:40	2.0km	13:20	2.4km	15:10
	2:00	10:20	0:50		0:30	12:00	1:20		1:50	

県境の丁岳(ひのとだけ)登頂記

当日の朝、一般国道13号新主寝坂トンネルの金山口のパーキングで7:00にと待ち合せていた大介君と合流する。「真室川町で一番高い山だ。」と彼が言うようにこれから2人で一等三角点丁岳(ひのとだけ)への登山に出かけるのである。以前、測量会社のベテランでありながら景観調査の対象のこの山を「ちょうだけ」と言っていたのには閉口した事がある。私にとっても初めての丁岳で、いつかは登りたいと思っていた。それがいよいよ今日実現する事となった。

真室川町側の方からも登れると聞いていたが、今回は地形図に登山路が表記されている秋田県側からの山行に向かう事となった。

登山道入口には予定時刻より15分前に到着した。4、5台が駐車できる待避場には既に1台の車が駐車していた。早速、身支度をすませて予定通りAm8:00に出発した。林道からすぐに丁川に下り、橋を渡った。案内看板や比較的新しい木橋といい秋田県側の整備状況は行き届いていた。橋を渡りきった傍に可憐な「ダイヤモンドソウ」の白い花が、ささやかながら我々ふたりを歓迎してくれるかのように咲いていた。



先客は登山？ 身支度を急ぐ



丁川に架かる真新しい木橋



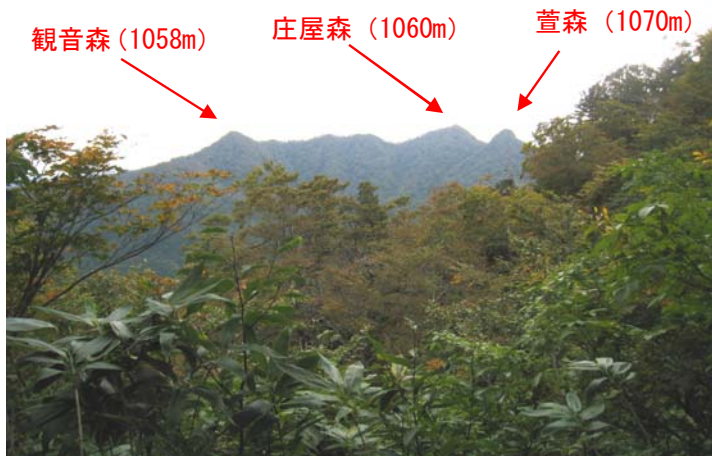
登山道の傍らに咲く「ダイヤモンドソウ」

いざ、丁岳めざして

木橋を渡りきるといきなりの急登となる。しかも岩場で連続した急な歩道となった。10月に入ったもののまだこの夏の猛暑の影響は続いていた。この山に体を慣れさせるべく出来るだけゆっくり、休まないようにと高度を稼いでいく事にした。登山口から山頂までの標高差は約750mある。幸いにも準備の良い大介君は高度計を持参していたので、地形図と照らしながら現在地を確認できた。

それにしても岩峰鋭い山に違いない。最初から急登が続きしかも稜線の幅が1.0m程度で沢に崩れ落ちている箇所は何度も遭遇した。同行の大介君もこの山は初めての山なのだが、彼もまた黙々と後から登り詰めてきた。

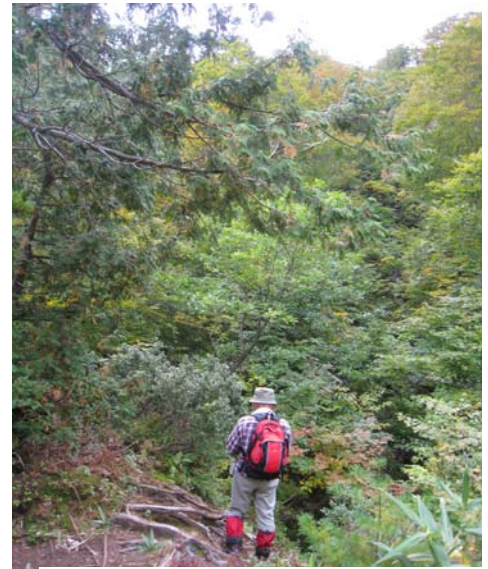
神室連峰は色々な登山口から登った事はあるが、最初からの急登と云うのも珍しい。丁岳の登頂後、萱森から観音森へと縦走する今回の予定だが、心して登らないと完走は容易ではないものと感じ、またとても登り甲斐のある山になるかもしれないと思えてきた。そんな期待を背負い、ただひたすら丁岳めざして黙々と登る。



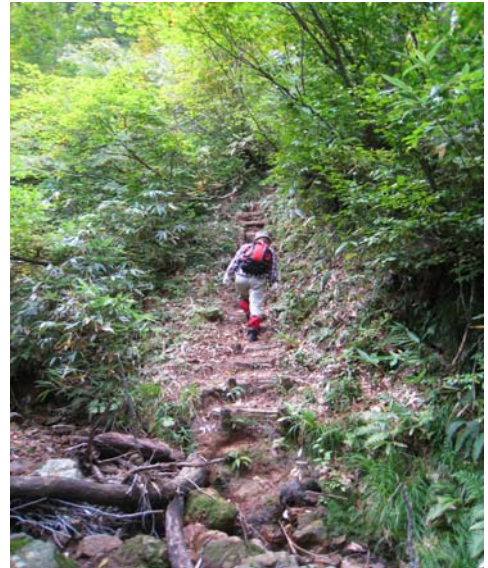
丁岳登頂後に縦走予定の東側の山を望む

熊、出没！？

山頂まで20分程に近づいた時、後を登って来た彼が、小声で「サイトオさん、ヤバイ！！」と声を掛けてきた。振り向いて彼の指差す前方を見ると、薄暗い藪の中で何か動いている。（彼は、熊出没！！と思ったらしい・・・）しかし数メートル先をよく見るとキノコ採りの人だった。（あの駐車場に先客として車を止めていた人だろうか・・・）一瞬の緊張はしたものの事なきを得た。



立ち止まって呼吸を整えて・・・



また急坂を登る・・・



平枝小学校の記念樹か？・・・

真室川で一番高い山に到着

秋田・山形県境の稜線の手前にお花畑の案内板があった。初夏の頃なら高山植物も見頃かもしれないが、2人とも「パス」する事にした。そこからほどなくして稜線に出た。目指す山頂はそこから数分で到着した。時刻は予定の10時丁度を指していた。大介君が「すごいねやア、予定の時間ぴったしだア!!」と声を発した。

山頂は意外と広々とした平坦地であった。天候は曇ながら時折薄日のさす天候で、絶好の登山日和に恵まれた。体力の補給のために此处でとりあえず軽食を摂る事とした。



丁岳一等三角点に置いた時計と高度計（右）
時刻は計画通り午前10:00
高度計は1145m（丁岳標高1146m）



真室川で一番高い地点に、タッチ!!。
急峻な登山道を登って来たのに
イイ顔、してますネー。



丁岳一等三角点（中央）と祠
左の標石は国有林の基準点



赤く色づいたナナカマドの実
夏の猛暑の影響で紅葉は早い
吹き渡る風に揺れていた。



丁岳三角点前で記念!?, イヤ証拠写真1枚
古くから崇められてきた山である。
登山道や周辺もよく整備されている。

丁岳山頂にくつろぐ

軽食で少しお腹が落ち着いた処で山頂からの眺望を楽しんだ。最悪、雨になるかもしれないと覚悟はしてきたが、この時間は雲も薄らいでナナカマドの赤い実を揺らして吹いてくる風も心地よい。さすがにこの場所からの鳥海山は間近で迫力があり凄い眺めである。真室川、新庄方面を眺めてみた。山また山に埋め尽くされて町並みは山の切れ目に点在する程度でしかない。

それに引替え、加無山や甑山の山容が眼下に広がり、その稜線や谷に刻まれた溪谷が、山で埋め尽くされた里の町並みへと延びている。

小休憩の間に大介君が「吾がふる里」を探しはじめた。自分の立ち位置からして高坂集落を確認すると「あの左側、高坂ダム管理課だァ」「こっちの方は山屋がァ・・・」と少々興奮した声で新発見を次々と報告してくれた。

山頂部は広々とした台形の様相を呈しているがその台形の淵は大鈍で断ち割った様な岩で囲まれた断崖で、そのまま深い谷に消えていた。

「萱森」「観音森」への県境の縦走路に何が待ちかまえているのかは未知の世界だが、簡単な縦走コースでない事はここまでの急登そして岩峰の上へ続く登山道から容易に認識できた。



山頂の淵は断崖となって
深い谷に延びている。



真室川町随一の丁岳山頂に立つ。
ご機嫌なダイスケン！！



山また山の切れ目の如く
真室川町高坂集落を望む。



山頂から東へ延びる登山路は
切り立った断崖の上にあった。

県境の縦走路を渡り歩く

20分程休憩の後、丁岳山頂を出発して西側に延びる秋田・山形の県境の縦走路に歩き出した。山頂の広場からいきなり急斜面の下りとなった。しかも、尾根道はあまり人が歩いていないらしく登山靴の踏み後もない。辛うじて最近伐採した跡で山道を確認する事が出来た。足跡からしてこの先に足を延ばす登山客は珍しいのだろうか。

鞍部まで下った処に真室川町側の「下山口」の道標があった。そして下山路を振り返ると先程まで休憩していた丁岳の東壁を目の当りにした。改めて岩山の威容を感じとる事となった。



岩肌に草木がくっついているだけ・・・
慎重に足元を選んで下る。



真室川町側への下山口を示す看板。
登山口はどこなのだろうか？・・・



まさしく岩峰が天に突き上げた山：丁岳
東側の鞍部から見上げる。

丁岳から観音森に至る尾根道は約3.6kmある。登山路として伐採された跡を辿るのだが、危険を感じる箇所は路肩の藪に入り灌木の枝を握っての歩行を余儀なく強いられた。

思えば、大介君との登山は今回が初めての事である。登山は気心がしれた同士に限ると云われるが果たして山での彼はどの位の体力、気力の持ち主なのだろう。今回の行程は、まだ1/3しか歩いていない。この先どんな場面が展開するのか。とても初心者が登る山でない事は確かである。途中、「風のコル」と云われる場所では崩れた崖の中に足を踏み入れて必死で横切る羽目となった。



男加無山（997m）と女加無山（924m）
間近に見る様は迫力がある。

萱森から庄屋森

萱森に到着して山頂からその行く手を見下ろして唖然とした。奈落の底に突き落ちるような急峻で、しかも岩肌に草が僅かに張付いた道だ。

「サイトオさん、ヤバイぜ!!!」またも大介君の眩きがした。岩の上を下るのは危険と判断し秋田県側の灌木に入り込んで枝をロープ代わりに掴み、お互いに声を掛けながら、慎重に鞍部まで降りた。安堵するまもなく今度は降りたのと同じ位の高さの「庄屋森」に登る事となった。

通常10分位の距離だがこの間30分費やす事となる。鞍部から再び登り中腹で振り返ると、登山路がまるで「V字谷」の様に見える。



萱森からの急降下する登山路（中央）
左側は岩で右側に僅かな灌木がある。

11:40。ようやく庄屋森に到着した。振り返ると薄曇りの中で歩いてきた県境の尾根道が丁岳へと続いていた。その中でも槍先のように鋭い萱森の峰が天に向かって突き上げる様に聳えている。

庄屋森には四等三角点があった。360度の景色見渡して呼吸が調った頃を見計らい昼食を摂る。ここが今回の山行のほぼ中間にあたる。

厳しい登山だが、時間はまだたっぷりあるし、雨の心配もない。大相撲の如く山と「ガッブリ」と取組んでいる・・・その充実感を肌で感じた。



萱森山頂で証拠写真に収まる。
三角点はないが標高1070m



「V字谷」から庄屋森に到着。
山頂は四等三角点がある。



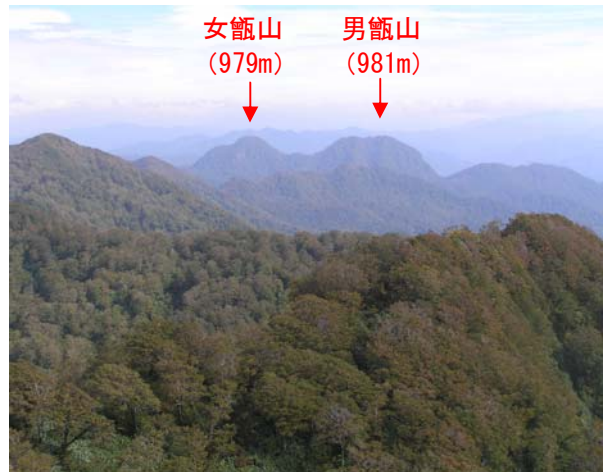
庄屋森から県境の縦走路を振り返る。
「東北の峠路」そのもの!?!?・・・

県境の峰から下山路へ

燃料補給（昼食）を済ませ、また尾根道を歩き出した。歩き出して100m位ですぐに県境の縦走路は藪で途絶えていた。登山道は県境から左に曲がり観音森に向かって延びていた。アップ・ダウンの道を30分程歩いて観音森に到着した。

観音森から登山口（398m）までは660mの標高差がある。実はこの標高差のある下りが疲労した下半身（足）を更に悩ませる事となった。既に2人とも膝の皿が笑い出していた。特に下り初めの頃は油断すれば転げ落ちそうな斜度である。

「悪戦苦闘」の末、登山口には15:15に到着した。予定から10分遅れたが、無事、車のある場所に戻った安堵感と、お互いの健闘に感謝した。



県境の登山路分岐付近から
並んで聳える甕山を望む。



県境との分岐から観音森を眺める。
今回の縦走路最後のピークとなる。



今回最後のピーク観音森で1枚。
ここにも手作りの道標がある。

山行を終えて

車の傍で荷物を下ろし、登山靴の紐をほどき改めて完走した充実感に浸った。

今回の行程はかなりの上級者コースであると改めて自負の念を抱いた。また、登山は登りより下りの方が「大変」との実感を再認識した。

初めての同行となった彼については、かなりの強者と認めるしかない。「あっぱれ」である。

解き放された心と体を車の座席に沈めた。激しかった登山の余韻に浸りながらも、車のアクセルを踏み込み、お互いの家路についた。



蛇足ですが、帰路の林道傍にありました
風流なのか「本名」なのか、笑えました。